うらうすの名建築

札幌市立大学　西川研究室

うらうすの名建築

浦臼町には明治以降の開拓期から昭和初期にかけての歴史的建築が複数残っています。これらの建築について、これまで「広報うらうす」にて隔月で紹介してきました。

この冊子は、これまで掲載した広報誌の記事をとりまとめ、さらに過去資料等をもとに番外編として作成した記事を追加して編集したものです。

いずれも町の歴史を語り継いできた建物なので、今後も永らく町民に親しまれる存在であることを願います。

2024 年 3 月

① 尾花商店（2022 年 7 月）
② 駅前石造倉庫（2022 年 9 月）
③ 館（2022 年 11 月）
④ 笹島邸（2023 年 1 月）
⑤ 聖園教会（2023 年 3 月）
⑥ 浦臼神社（2023 年 5 月）
⑦ 旧宮本新聞店（2023 年 7 月）
⑧ 友成邸 前編（2023 年 9 月）
⑨ 友成邸 後編（2023 年 11 月）
⑩ 太田商店（2024 年 1 月）
⑪ 鶴沼地区の石造建築（2024 年 3 月）
番外編　坂本直寛邸
番外編　浦臼のハイカラ建築
番外編　ちょっと前の街並み
番外編　自然豊かな三日月湖

※（　　）は広報うらうすへの掲載年月

らうす建物紹介①

尾花商店・蔵

大火を生き残った頑丈な石造の建物

力強い佇まいの建物「尾花商店」は札幌軟石のブロックからできている寄棟屋根の石造店舗です。元々蔵が石造で店舗は木造でしたが、大正十二年の大火で蔵だけが焼け残りました。それをきっかけに、周りも石造の店舗を構えるようになり、尾花商店も石造で店舗を建て直したそうです。それにより蔵と店舗の竣工年が違うようになりました。綺麗に形が残っている石造の建物は貴重で国の文化財にも指定されてもおかしくない立派な建物です。ぜひ歴史的な視点で建物を観察してみてください。

【構造・規模】
店舗・蔵　石造二階建
【竣工年】
店舗　　昭和初期
蔵　　大正12年（1923）

▲蔵側の１階内部

▲蔵側の２階小屋トラス

▲店舗側の２階小屋トラス

札幌から運ばれてきた軟石

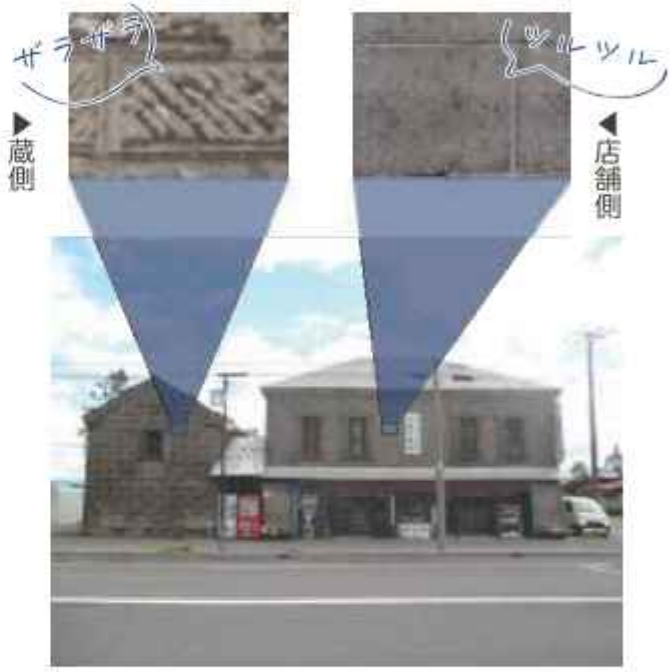
札幌軟石とは四万年前に火山活動で流れ出た火砕流が冷えて固まった凝灰岩の石材です。これは札幌市南区の石山から切り出され各地に運搬されていました。昔の石切場は現在緑地公園（石山緑地）となっていて天気の良い日は人々で賑わっています。大正時代には石切場から豊平川まで馬車鉄道が通り、豊平川から石狩川を通って船で軟石を運んでいたようです。そうして札幌から運ばれてきた札幌軟石は尾花商店や蔵などに使用されました。暴れ川と言われるほどぐにゃぐにゃな石狩川を遡上するのは骨が折れそうですね…。

◀豊平川から石狩川を経由して札幌軟石が浦臼に運ばれた

▶札幌軟石の石切場だった「石山緑地」

石材の表面の質感

店舗と蔵をよく見比べると軟石の表面の仕上げが違うことがわかります。店舗側は「平滑仕上げ」という仕上げになっていてツルツルした見た目です。 一方蔵側は「ツル目仕上げ」といい斜めのギザギザが刻みこまれています。大正昭和に流行った仕上げで職人が手作業でひとつひとつ仕上げていたそうです。その違いをぜひ直接見ていただければと思います！



▶蔵側

◀店舗側

こんにちは！
私は札幌市立大学の三角颯音（みかどかぜね）と申します。卒業研究の一環で浦臼町の歴史的建築物を調査し広報で紹介することになりました。よろしくお願い致します！

ららうす建物紹介②

木骨石造倉庫

旧浦臼駅前にある大きな倉庫の正体とは？

外壁に「貯金は農協へ　浦臼村農協」という看板が掲げられているので、村から町に昇格した昭和三十五年以前に建てられた倉庫であることがわかります。２０２０年まで通っていた札沼線で農作物を運搬する時、それらを保管する倉庫で小樽運河沿いに並んでいる倉庫と同じ「木骨石造」と呼ばれる構造です。農村地域の駅前には必ずと言っていいほど石造や煉瓦造の倉庫が建てられていました。現在、恵彩館横にある石造倉庫も、晩生内駅前にあった倉庫を解体した石材を再利用したそうです。壁に使用されている札幌軟石は温度と湿度を一定に保つ能力に優れており、特にそれらに影響を受ける農作物を保存するのに適しています。現在の建築基準法では建てられないのでとても貴重な倉庫となっています。

◀内部の様子

木骨石造とは

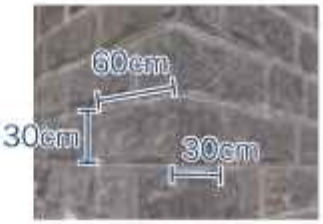
▲木骨石造の仕組み

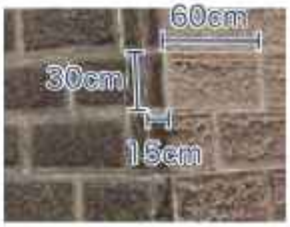
▲手違いかすがい

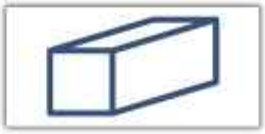
木骨石造とは木材の骨組みに沿わせるように石材の壁を積み上げた建築です。明治中期から昭和初期に多く建築され、本州方面にもいくつかありますが、特に北海道に多く存在します。用途は倉庫や店舗が多く、先述した通り内部の温湿度が安定するため農作物の保管に適しています。旧浦臼駅前にあるこの倉庫は厚さ１５ｃｍの石材を積み上げて作られており、骨組みと石材は鋳物の「**手違いかすがい**」で一段おきに留められています。屋根を「**キングポストトラス**」という木材を三角形に組み立てた構造にすることで内部に柱がなくても積雪に耐えられるようになっています。

▲木骨石造倉庫の断面図

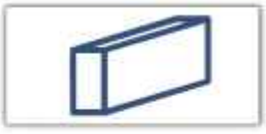
石材の大きさと呼び方







▲尾花商店の石材



▲木骨石造倉庫の石材

この倉庫は同じく石材を使用している尾花商店の店舗と同時期に建てられたと推測できますが、石材の大きさが実は少し違っています。尾花商店で使用されている石材は厚さが３０ｃｍなのに対し、倉庫は１５ｃｍと半分の厚さしかありません。石材には単位があり、**１尺 ×1 尺 ×1 尺の立方体の石材を「１才」**というそうです。尾花商店の石材は１尺 ×2尺 ×1 尺なので2才ということになります。では倉庫は１尺 ×2尺 ×0.5尺なので１才ということになるのでしょうか…？

※1尺＝約３０ｃｍ

こんにちは！
私は札幌市立大学の三角颯音（ミスミ ハヤネ）と申します。最近暑い日が続きますが、いかがお過ごしでしょうか？先日、浦臼町で現地調査をしたのですがあまりの暑さに熱中症になってしまい、浦臼町の洗礼を受けた気がしました……。皆様も水分補給をこまめに行い、熱中症にお気をつけてください！
この記事が掲載されている頃には美味しい農作物の収穫の季節でしょうか。また浦臼町に伺う機会がありますのでとても楽しみです！！

らうす建物紹介③

舘（旧郵便局）

郵便局から食事処へ 洋風スタイルな木造建築

ご飯時にお客さんで賑わいを見せており、町民の皆に愛されている食事処「舘」ですが、建物の最初の用途は浦臼村の郵便局として昭和１０年頃に竣工しました。札沼線の全線開通と同じ年ですね。現在もエントランス部分では郵便局時代の名残である窓口がお客さんをお出迎えしてくれています。郵便局として使用していた時期は、役場庁舎や消防署なども木造建築で、石造の建築もあり、市街地はちょっとハイカラな景色だったことが想像されます。

【構造・規模】
木造　２階建て
【竣工年】
昭和 10 年頃

◀旧郵便局

◀内部の様子

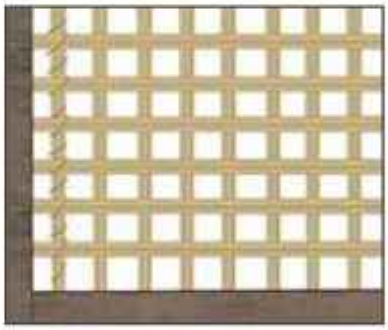
モダンな建築様式

この時代の郵便局はまちのシンボル的な建物になるので当時の郵便局や通信を管理する逓信省は全国の主な郵便局に近代建築様式を取り入れたようです。浦臼村の郵便局も例に漏れずモダンなスタイルとなっており、上げ下げ窓は札幌にある重要文化財の「豊平館」と同じ様式になっています。しかし、洋風スタイルであればペンキ塗りにするところですが、この建物は民家と同じ素地の下見板張りになっています。現在の「舘」は金属サイディングに覆われていますが、サイディングを剥けば当時の下見板が出現します。ちょっと見てみたいかも…？

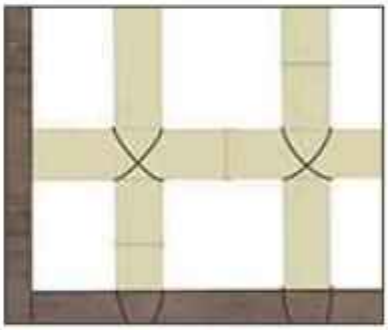
▲「舘」
何も塗っていない素地の下見板

▲「豊平館」
こっちは白とウルトラマリンブルーのペンキ塗り「舘」と同じ上げ下げ窓

北国ならではの構造



▲葦の木舞



▲竹の木舞

外観は洋風ですが、構造は和風で昔からある木造軸組みというものです。そして特徴的なのが「土塗り壁」本来、竹を組んだ「木舞」に土を塗って壁にしますが、北海道などの寒冷地ではなかなか竹が取れないので「葦」で代用しています。町内の同年代の建物でも同じ造りがみられました。葦は竹よりも強度が弱いため竹の場合よりも間隔を細かくして、束ねて土壁の下地にしています。北国ならではの工夫を感じますね。

こんにちは！
札幌市立大学の三角嬢音（みかど ひでね）と申します。めっきり寒くなって来ましたが、いかがお過ごしでしょうか？私は急な寒暖差にやられて体調を崩しました。みなさまもお気をつけください！！私はこれまで何度か浦臼に行ったとき必ずと言って良いほど舘でご飯を食べているのですが、あんなにメニューが豊富なのに何でも美味しくて本当に毎回感動しています！まだまだ浦臼に伺う機会があるのでいつかは全メニュー制覇とかしてみたいですね～。
写真は舘で頼んだホットケーキです！美味しかった！

うらうす建物紹介④

笹島邸

町の歴史を伝える町内で最も古い建物のひとつ

国道から少し奥まっているので、目立たないのですが、北門信用金庫の裏手にこの住宅は建っています。大正時代に建築され、築100年を超えています。町内に残る最も古い建物のひとつです。

もともとは雑穀商の宮岡氏が建築した後、昭和3年から笹島家が所有しているとお聞きしました。当初は柾葺き（まさぶき）屋根でした。笹島家では長く農業を営んでいたので、周囲に納屋や馬小屋、養蚕（ようさん）小屋もあったのですが、数年前に解体されたそうです。

【構造・規模】
木造平屋建て　33.5坪
【竣工年】
大正期

本州の典型的な民家の様式

典型的な本州地方の民家の様式といえます。外壁の一部や座敷は漆喰（しっくい）仕上げが施され、格式の高い住宅のつくりであることが分かります。おそらくこの住宅を建築した宮岡氏の出身地の住宅を真似たと思われます。

東面には4間（けん）の長さの縁側があります。北海道ではほとんど見ることがありませんが、サザエさんの家の縁側のようです。天気の良い日にひなたぼっこすると気持ちよさそうです。

南側半分は現在物置になっていますが、当初は農耕のための納屋として使われていたかもしれません。

気持ちよさそうな縁側

しっかりした構造

柱はすべて4寸（12cm）角で、現代の木造住宅より断面積が3割ほど大きいです。見上げると梁は2段になった「重ね梁」で、こうすることで大きな梁と同等の強度をもたせています。床の木材は過去に交換されているようですが、上部は100年前のままと思われます。基礎は地面からの湿気がこもらないように、風通しの良い束立て基礎です。本州ではこれが普通ですが、この地では寒かったに違いありません。壁は伝統的な土塗り壁です。本来の土塗り壁では下地の「木舞（こまい）」に竹を使うのですが、浦臼では竹が生えないので、代わりに葦を使っています。11月号に掲載した「舘（旧郵便局）」も同じ造りでした。

数年前から空家になっているので、ところどころに傷みが見られますが、構造体はしっかりしているので、狂いや傾斜などは見られません。

内部はさながら民族博物館のよう

座敷と物置には、代々使われてきたと思われる調度品が多数置かれていて、さながら民俗博物館のようです。一部を下の写真に紹介します。

①囲炉裏
②足踏みミシン
③杵と臼
④角蒸籠
⑤金具付き和箪笥
⑥鉄火鉢
⑦炭火アイロン

こんにちは！　札幌市立大学で教員してます西川忠です。毎度この記事を書いている三角颯音が卒業研究の追い込みで切羽詰まっているので、今回だけ代打で登場させていただきます。私は高校まで浦臼町に住んでいて、実家もずっと浦臼にありましたので、半分町民のつもりでいます。もうしばらくこの活動を続けていきますので、よろしくお付き合い願います。

ららうす建物紹介⑤

聖園教会

町民の支えとなって 128 年 4 代目の会堂は…

聖園教会は浦臼での伝道活動が始まってから今年で 128 年の歴史を持っています。武市安哉に率いられ高知の青年たちが浦臼に入植した当時は笹小屋のバラック建築でしたが、明治 30 年には本格的な会堂を浦臼沼付近に建設。しかし暴れ川である石狩川の洪水は伝道活動の障壁となり、明治 39 年、現在の場所に移築しました。そして昭和 34 年、会堂老朽化のため現在の会堂に建て替わりました。建築工事は信者の労働奉仕によったとのことです。すごい…！伝道開始 100 周年を迎えた平成 5 年に会堂の大規模改修工事が行われました。今後も大切に使われることを願います！

今回は油絵風にしてみました！

【構造・規模】
木造 平家（一部2階）建て
【竣工年】
昭和 34 年

◀旧会堂

▲旧会堂の銘板

◀会堂の竣工時写真

◀礼拝堂全景

聖園教会の兄貴分！？

実は現在の聖園教会の建物にはモデルが存在します。それは札幌市にあった「札幌北一条教会（旧会堂）」です。写真を見比べてみても左右対称なところや、正面の特徴的な開口がそっくりですよね。こちらの教会は北海道で著名な建築家の田上義也が昭和 2 年に設計したものです。札幌北一条教会は残念ながら昭和 54 年に解体されてしまいましたが、その分弟分にはまだまだ頑張ってもらいたいですね。

▲外壁改修前の聖園教会

▲札幌北一条教会

そっくり！

竣工：昭和 2 年
設計：田上義也
施工：伊藤組土建
解体：昭和 54 年

伊藤組土建（株）HP 実績紹介より
https://www.itogumi.co.jp/trackrecord/architecture-detail.php?eid=00010

100 周年の大規模改修工事

▲改修状況

上にも書きましたが伝道開始 100 周年を記念して会堂の大規模改修工事が平成 5 年に行われています。壁に断熱材（グラスウール）を入れたり、内壁の仕上げを新しくしたりと大掛かりな改修でした。大きく変わったのは外観です。当初はくすんだ水色の下見板張りでしたが、現在の姿である金属サイディング張となりました。内部には当時の下見板が残っているそうです。

◀外壁の下見板

こんにちは！
札幌市立大学の三角颯音（みすみ はやね）と申します。私事ですが、無事卒業研究も終わり、今月で大学を卒業できることになりました！卒業研究でご協力いただいた浦臼町の方々には感謝でいっぱいでございます！本当にありがとうございました！！
……いや…卒業と言ってもそのままこの大学の大学院に進学するのでぶっちゃけ生活は全く変わりません（笑）。今後とも浦臼町に関わらせていただきますので暖かく迎えていただければ幸いです。これからも宜しくお願い致します！

【参考資料】1) 川島洋一「日本基督教会聖園教会の会堂造りとその変遷」日本建築学会学術講演梗概集　昭和 59 年 10 月
2) 聖園教会百年記念写真集

浦臼神社

エゾエンゴサクとカタクリに囲まれた フォトジェニックな神社

浦臼の写真といえば、顔を出したエゾリスにエゾエンゴサクとカタクリの花畑が綺麗な浦臼神社の境内が思い浮かびますよね。現在の社殿は２代目であり、初代の落成からは112年の歴史を有しています。浦臼に入植した友成士寿太郎が土地と神殿を寄進したところから始まります。実は、最初は「鶴沼神社」という名前でしたが昭和 43 年に社名を変更し、「浦臼神社」となりました。下の方でもっと詳しく書きますが、現在の社殿は三笠市の幾春別住友奔別神社を移築したものになります。この神社はなんと言っても参道が綺麗ですよね！国道 275 線から鳥居をくぐってさらに札沼線跡をわたり、100 段以上の石段を上がった後に自然いっぱいの境内が現れるというのがなんともノスタルジックな雰囲気です…！この記事が公開されている頃が１番の見頃ですかね～

▲境内の花とエゾリス

◀札沼線跡と石段

雪国浦臼ならではの屋根事情

去年の浦臼の大雪は凄まじかったですね！私は役場の 2 階まで迫った雪に驚きました。神社建築で共通して特徴的なのは「屋根が大きく、軒の出が大きい」ことにあります。それが大雪とどんな関係があるかと言いますと、軒の出が大きいほど雪が載る重量も大きくなり先端側が歪んだり折れてしまう恐れがあります！しかも、浦臼神社（というか北海道の神社のほとんど）は切妻屋根を十字に直交させた屋根形状になっているので谷の部分に雪が溜まって落雪しにくくなっています。神社建築は豪雪地帯と相性がとても悪いんですね…。浦臼神社は軒先を支える３本の丸太柱を増設し大雪対策をしているようです。去年の大雪はこの３本が頑張ったのでしょうか。

▲増設した丸太柱

幾春別神社からお引越し！

上にも書きました通り、現在の浦臼神社の社殿は昭和 47 年に三笠市の幾春別住友奔別神社の社殿を移築してきたものになります。移築してからは 50 年ほど経ちましたが、社殿自体はそれ以上の長い歴史を有していることになります。初代と比べると全く形が違いますね！現在の幾春別神社とも比べると結構似ているかも…？

▲現在の幾春別神社

▲初代の浦臼神社

こんにちは！
札幌市立大学院の三角颯音（みかど かざね）と申します。この春、大学院に進学いたしました！今年も広報の１ページをお借りして浦臼町の建物に関する記事を書かせていただきます！よろしくお願い致します。実は電話帳をデザインさせていただきました。臼子ねぇさんとエゾリス、エゾシカがカタクリとエゾエンゴサクの中で糸電話をしている絵を描きました。皆様に気に入っていただけたら幸いです！…描いておいて何なのですが、まだ生でカタクリとエゾエンゴサクが咲いているところを見たことがありません！今年こそ…！見たい…！

らうす建物紹介⑦

旧宮本新聞店

昭和前期に建てられた長生きで立派な元新聞店

旧宮本新聞店は国道 275 号沿いにあった建物です。2022 年の秋に解体されたため、現在は実物を見ることができません。実は、この建物は歴史的建造物にも匹敵するご長寿さんでした。

詳細な建築年は不明ですが、構造様式から見て戦前の浦臼村時代に建築されたと思われます。したがって、80 年以上前から建っていたことになります。当初は民家でしたが、のちに新聞店として利用されたとのことです。

外壁がただの下見板張りではなく上だけ漆喰塗りになっており、デザイン的に工夫されています。2 階の和室は当時としてはおしゃれな内装で、とても格式の高いお部屋であることがわかります。この建物、立派ですね……！

▲2 階の和室（畳撤去済）

▲正面玄関の引き戸

上と下で和洋折衷な窓

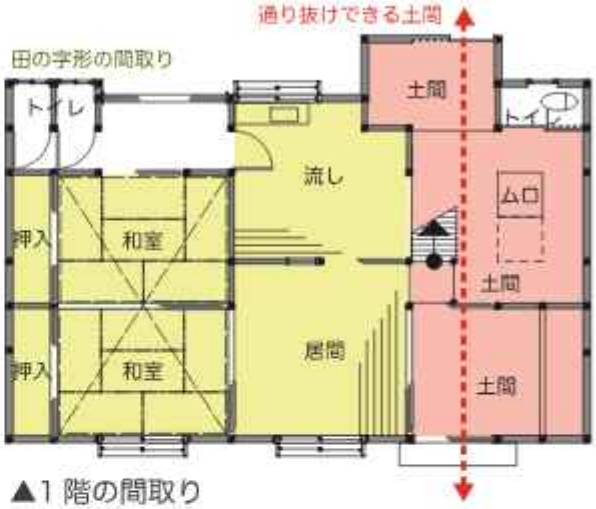
1 階は引き違いの出窓、2 階は上げ下げ窓と、窓のスタイルが和洋折衷になっています。ただ、お部屋が和室であることから、外観のみ洋風の意匠を取り入れたのかもしれませんね。また、窓は単純に半紙サイズのガラスを格子状に割りつけたのではなく、このデザインに合わせて切り合わされています。こだわりを感じますね……。

◀1 階の引き違い窓

◀2 階の上げ下げ窓

農家じゃないのに農家の間取り

1 階内部の間取りは田の字形の居室に、玄関から勝手口まで通り抜けできる土間が付いています。外観には洋風のデザインを取り入れていますが、この間取りは本州方面の典型的な農家住宅と同じです。昭和前期とはいえ、街の中心部で農業を営んでいたとは思えないので、どうしてこのような間取りになったのか不思議です。



▲1 階の間取り

冷蔵庫の前身！「ムロ」

1 階の土間部分にはコンクリート造の「ムロ」があります。冷蔵庫がなかった当時は、温度や湿度の変化が少ない「ムロ」に野菜や漬物、味噌などを貯蔵していたのでしょう。北海道は涼しいので、本州より保存しやすそうですね。

▲ムロ

こんにちは！
札幌市立大学の大寺梨香（おおてら りか）と申します。昨年の秋、課題の一環でこの旧宮本新聞店を調査させていただいた縁から、今回先輩が連載している浦臼町の建物に関する記事を書かせていただきました。写真は、調査の帰りに舘でいただいたオムライスです。舘、美味しいメニューがたくさんニューがたくさんあって素敵ですよね！私は千歳に住んでいるので中々浦臼町に赴くことができないのですが、今度友人を誘って浦臼町の魅力的な建物でも見てまわりつつ、舘で美味しいご飯を食べて楽しみたいです。

ららす建物紹介⑨

友成邸　前編

浦臼町の入植者 友成士寿太郎 のお屋敷

浦臼町で最も古い建物の一つである赤い屋根が特徴の大きなお屋敷は、徳島県羽ノ浦村（現：阿南市羽ノ浦町）で助役を務めていた友成士寿太郎が３年かけて完成させたものです。詳しいことは下で説明しますが、棟梁を含めた人材や建物の材料を徳島県から運んできた、とても手間とお金がかかっている建物となります。なので本州の建物の名残がちらほらと見ることができます。母家の他に、敷地内には使用人が住んでいたと思われる東側の納屋と北側の納屋があります。浦臼町開拓の歴史を担う広いお屋敷で友成家がどんな暮らしをしていたのか、とても気になりますね…。

◀内部の様子

▲新築の友成邸

◀百年記念碑

四国から全部運んできた！？

前述したように友成邸は建物の材料を徳島県から運んで来ています。その証拠に、土塗り壁の内部の木舞という部分に北海道では生えない竹が使われていることがわかります。（舘や笹島邸は葦が使われています。竹を使うのが本来の土塗り壁です。）棟梁も徳島県から連れてきています。建物の様式は北海道で他にないほどの「庄屋づくり」「奉行所づくり」とも言われているとても貴重な建物です。徳島から北海道まで直線距離で 1160km、とんでもないお金と費用がかかっていることが分かります。友成士寿太郎の「本物」へのこだわりを感じますね！

◀土塗り壁

内部の木舞が竹で編まれていることがわかる。

成形された梁▶

当時の梁材は丸太の凹凸がついたまま使われることが多かったが友成邸は製材されている。

使用人にも質のいい部屋を

友成邸は納屋にもこだわりがみられます。当時の納屋や使用人の部屋は壁は板を打ち付けただけというバラック的なものが一般的だったと考えられます。しかし、友成邸の納屋は違います！使用人の部屋の内装は母家と同じ、土塗り壁の上に漆喰仕上げされており、納屋も土塗り壁となっています。当然お金がかかりますが、それだけ友成家の勢いというか格式高さを伺えます。しっかりした作りだからこそ、老朽化はあれど今も残っているのですね！

▲北側の納屋

▲使用人の居室

こんにちは！
札幌市立大学大学院の三角颯音（みすみ　さつね）と申します。なんだかこの建物紹介の記事を書くのがすごく久しぶりに感じます…。みなさまいかがお過ごしでしょうか。友成邸は歴史も建物も深すぎて１月だけでは紹介しきれず…再来月も友成邸の話になります！先々月で浦臼町の建物調査が終わったのでこの記事の題材も出揃い、ゴールが見えてきたような感覚です。最後まで走り抜けますのでよろしくお願い致します！最近とっても暑くなってきています。私もかなり夏バテ気味です。どうか熱中症には十分お気をつけてお過ごしください！

らうす建物紹介⑩

友成邸　後編

浦臼に入植した時の様子

広報９月号に引き続き、友成邸の紹介をさせていただきます！今回は建物の特徴的な間取りや損傷度合いについて書きたいと思います。

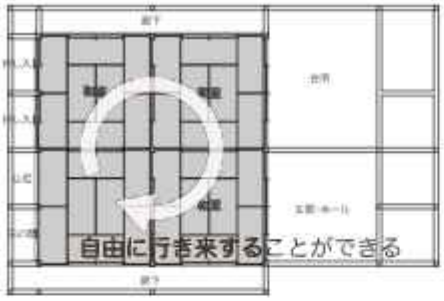
明治 24 年に浦臼の入植を開始した友成士寿太郎一行は現在の鶴沼やキナウスナイの方に農場を開きます。雪深い浦臼の地を開拓するのは一筋縄では行かなかったようです。友成家一行の最初の家はこのような立派なものではなく、切り開いた森の木とその皮を使った小屋のような建物でした。その様子や入植の歴史は浦臼町郷土史料館でみることができるのでぜひ一度足を運んでみてください！

◀浦臼入植時の農場分布

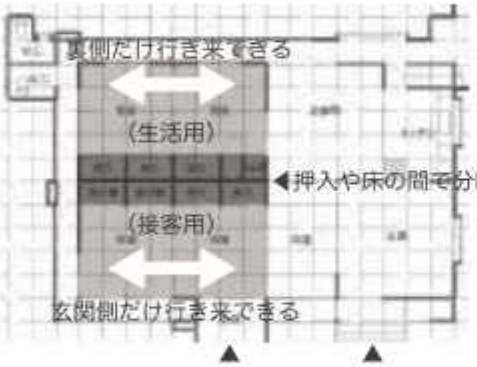
名家の間取り

友成家の間取りは一見、農家住宅にみられる田の字の間取りと似ていますが実は厳密には違います！下の図のように農家住宅の間取りは 4 つの部屋をそれぞれ行き来できるように開口部がありますが、友成邸は玄関側と裏側に仕切られています。これをみると玄関側の 2 つの部屋で接客を行い、裏側で家族が生活していたと想像することができます。友成家にいかに訪問者が多かったかが伺え、家族の安らぎを守るための間取りだったのでしょうか…。

▶一般的な田の字型の間取り



▶友成邸の間取り



正面側には来客用の和室に上がるための玄関と、土間に繋がる使用人や御用聞きのための勝手口があり、使い分けられています。特に来客用の２間の和室（右写真）は仕上げやしつらえが立派です！

歴史深さゆえの老朽化

明治 36 年に建てられたこの建物は 120 年の時を経て老朽化が進んでいます。外壁の漆喰が一部剥がれてしまっていたり、たくさん降る雪によって屋根の軒が歪んでしまったり…。さらに下見板と呼ばれる外装材が剥がれてしまっているところも所々見受けられます。とても歴史のある大事な建物なので補修して何かしらの目的で使っていくことでさらに後世に繋げることができるのではないかと思います。

◀漆喰が剥がれている

◀下見板の脱落

軒の変形▶

こんにちは！
札幌市立大学大学院の三角(みかど)颯音(かぜね)と申します。すっかり秋になり肌寒い季節となりましたがいかがお過ごしでしょうか。今月も友成邸でらうす建物紹介をお送りしました！今回でこの記事は記念すべき 10 回目となります！思い返すと結構書いてきたんだなと感慨深くなりますね…（何回か先生と後輩に任せてしまいましたが…）。この紹介記事も残すところあと僅かとなりますので最後までお付き合いいただけると幸いです！季節の変わり目で風邪を引きやすい気温差となっていますのでどうぞご自愛下さい！

うらうす建物紹介 ⑪

太田勉強堂

浦臼の子どもたちに、なくてはならない文房具屋さん

【構造・規模】1階：石造（札幌軟石） 2階：木骨石造
【竣工年】昭和初期

太田勉強堂は昭和初期に現在の位置から国道を挟んだ向かい側に建っていましたが、昭和20年代に現在の位置で建て替えられました。写真①は建て替え後間もない昭和20年頃の様子です。

現在は化粧品や雑貨の販売が主ですが、筆者が子供の頃は店の名前通り、もっぱら文房具販売を行っていました。浦臼小学校と浦臼中学校に近いことや、統合前でも小中学生あわせて500人以上の児童・生徒がいましたから、浦臼の子供たちにとってはなくてはならない文房具店でした。ちなみに当時は町立浦臼高校もありました。

後年、南側に店舗、西側（裏側）に住居部分を木造で増築し、現在は化粧品や雑貨の販売を行っています。創建時の石造部分はほぼ当初の姿のままです。石造洋風の外観ですが、2階の内部が和室になっている点は尾花商店と同じです。

石造＋木骨石造＋鉄筋コンクリート造＋木造

軟石を用いた店舗建築は小樽市などでも見られますが、その多くは木造骨組みの外側に軟石を積んだ「木骨石造」と呼ばれる構造です。一方、太田勉強堂は1階が厚めの札幌軟石を積んだ石造で、2階が木骨石造です。上下階で構造が違っている珍しい造りです。また、2階道路側の軟石外壁面の直下は店舗空間なので、そこに石造壁を配置する訳にはいかないため、2階の軟石外壁は鉄筋コンクリート造のフレームで支えています。

したがってこの建物の構造形式を丁寧に言うと、石造＋木骨石造＋鉄筋コンクリート造で、2階床と屋根は木造の混構造という少々複雑な構造です。

約80年経った現在でも建物にゆがみなどは全く見られず、創建当初にきちんと設計・施工された建物であることと、札幌軟石が耐久性に優れていることが分かります。

写真①　昭和20年代の太田勉強堂
（浦臼町郷土資料館所蔵）

石造外壁の表情

2階の道路側の4つの縦長の窓（写真②）には引違いのアルミサッシが嵌められていますが、写真①を見ると当初は洋風の上げ下げ窓であったことが分かります。尾花商店と同様な窓であったと思われます。

窓の上部には飾り模様のついたまぐさ※があり、窓上部の重量を支えています。まぐさの上には傾斜した石が並ぶフラットアーチが載っていて、意匠的な軟石の割付けがなされています。

外壁に使用されている札幌軟石の表面を見ると、写真③のように、ノミのようなもので細かく窪みを付けた「小叩き仕上げ」です。大正期に建てられた尾花商店の蔵は、ツルハシを使って軟石を手で切り出していた時代の「ツル目仕上げ」でしたが、昭和期に建てられた太田勉強堂では、機械で切り出した軟石の平滑面に意匠的に凹凸をつけるために小叩き仕上げとしたのかもしれません。

※まぐさ　窓上部の壁の重量を支えるために、窓の上辺に渡す横架材

写真②　2階の縦長窓
かつては上げ下げ窓でした。
装飾されたまぐさが載っています。

写真③　軟石表面の小叩き仕上げ
ノミのようなもので叩いて凹凸を付けています。

札幌市立大学で教員してます西川忠です。これまで、主に私の研究室の三角織音が記事を書いていましたが、太田勉強堂は私が子供頃に大変お世話になった思い出深い建物なので、今回は私が筆をとらせていただきました。

私が子供の頃は、通学経路でもあったので、友達と一緒に用がなくても店にしょっちゅう出入りしていた覚えがあります。

石造の部分はその頃からほとんど変わっていないので、この建物を見ると小学生の頃を思い出します。本文にも書きましたが、札幌軟石を使った建物はたいへんしっかりしているので、町の顔として在り続けてほしいものです。

うらうす建物紹介⑫

鶴沼地区の石造建築

国道を挟んで向かい合う石造建築

鶴沼地区の中心に、国道を挟んで向かい合う石造建築があります。
大きな方は、JA ビンネの農業倉庫、小さい方が尾田さんが所有する石蔵です。
今回は２つまとめて見ていきたいと思います。

石蔵（尾田さん所有）
【構造・規模】
木骨石造　２階建
【竣工年】
昭和 11 年

JA ビンネ石造農業倉庫
【構造・規模】
石造　平家
【竣工年】
昭和前期（札沼線開通前と思われる）

農作物の保管にピッタリ！

建物の造りや軟石の仕上げ、立地から考えると建築されたのは昭和 10 年の札沼線開通前と思われます。
①軟石の表面が手作業で切り出している時代と思われるツル目仕上げであること
②この種の倉庫は、鉄道の駅の近くに立てるのが普通ですが、旧鶴沼駅から離れていること
以上の理由から、札沼線が開通する前に石狩川と牛馬で軟石を運搬していたと思われます。
この倉庫は札幌軟石を構造体とした純石造（組積造）です。札幌軟石には湿温度調整が優れているという特徴があり、実際に 2023 年の夏に 1 ヶ月間計測したところ、外気の湿温度が大きく変動しても倉庫内は非常に安定していました…！農作物の保管にとても適していたんですね。

▲農業倉庫の内部の様子
小屋組はキングポストトラス

徳島からの入植者の石蔵

蔵の小屋組の落成記には「昭和 11 年 7 月 15 日落成、家主　森川鹿助」と書かれており、隣接して建てられている森川翁の「頌徳碑」は友成又六の謹呈によるものとあります。当時は徳島から入植してきた森川家の蔵であり、調査時（2023 年）で 87 年経過しています。
この蔵は木骨石造ですが、外壁の軟石の厚さが 290mm と一般的な木骨石造の蔵より厚くなっています。表面は右の写真のようにノミなどで叩いて凹凸をつけた「小叩き仕上げ」となっており、丁寧で美しい手間のかかった仕上げです。

◀石蔵の落成記

昭和十一年丙子
七月十五日落成
建築請負大工　橋本留作
石工事請負　鏑城周次
家主　森川鹿助
當歳六十三歳
建之

と書かれています。

◀小叩き仕上げ

ノミのようなもので叩いて凹凸を付けます。

こんにちは！
札幌市立大学院の三角（さかく）蟹音（かにね）と申します。遅ればせながら完成した町営バス浦臼滝川線を見ました！また臼子ねぇさんを描かせていただけて光栄です。心を込めて描きましたので細部までじっくりと見ていただけると光栄です！（エゾエンゴサクとカタクリを一本一本描いてます）

うらうす建物紹介 番外編

坂本直寛邸

浦臼に坂本龍馬の甥の住宅があったのを知ってますか？

坂本龍馬の甥である坂本直寛が浦臼に住んでいたことはご存知の方も多いと思います。直寛は明治31年、46歳の時に高知から浦臼に移住しました。浦臼でキリスト教の布教活動などを精力的に行いましたが、その経歴や活動については書籍等で紹介されているので、ここでは坂本直寛邸について紹介します。

浦臼町史には次のように書かれています。「浦臼沼北岸の小高い森の一隅に、ロシヤ風の角材を組んで積み重ねた二階建が直寛の住居であった。大きな家ではないが、きちんとした日本座敷もあって当時の住家としては浦臼第一と言われた。珍しい建物なので残されていたが、昭和三十九年頃、石狩川の治水工事でとりこわされた。」

所在地は現在の浦臼第6町内で、浦臼沼のそばに説明板が立てられています。

坂本直寛邸　（浦臼町史より）

変わった校倉造りの住宅

写真を見ると木材を直交させて積み上げ、洋風の上げ下げ窓が付いています。建坪60㎡程度の総2階建ての立派な邸宅です。基礎が地面より1m近く立ち上がっていますが、たびたび石狩川が氾濫する土地ゆえの対策でしょう。

構造的な特徴は、校倉（あぜくら）造りのように木材を積み上げているところにありますが、正倉院やログハウスでは木材が交差する箇所で木材の上下面を欠き込んで噛み合うようにしますが、直寛邸では木材を欠き込むことなく積み上げる変わった構造になっています。

坂本直寛住居跡の説明板

解体材が保管されています

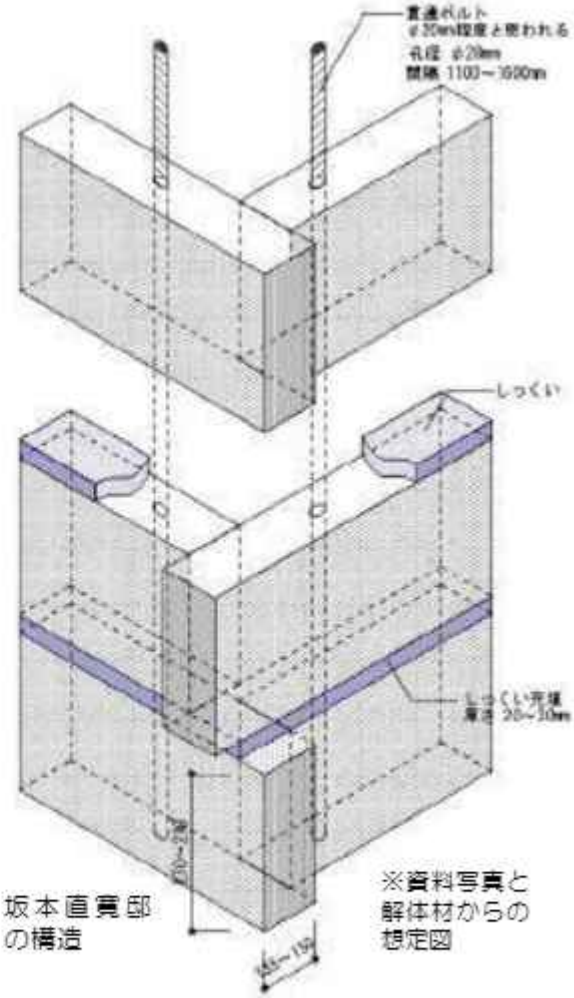
実は、町内の今田建設さんの倉庫に解体材の一部が保存されています。これを見ると構造の詳細が分かります。木材は厚さ13.5～15cm、高さ27～28cmの大きな材です。積み上げた木材が一体になるように、縦方向にボルトを通して締め付けるようになっているので、相当に強固な造りだったと想像します。

木材の厚さがこれだけあると、現代の断熱材50mm相当程度の断熱性能があったと思われます。また、写真を見ると木材の間に漆喰のようなものが挟まっているので、これで隙間風を防いだと思われます。

明治時代にこれだけ大きな製材を大量にどうやって集めたかや、たいへん珍しい構造なので、何を手本として建てたかなど、分からないこともあります。

保管材は坂本直寛邸の創建から125年を経た貴重なものなので、有効に保存活用されることを期待します。

今田建設さんに保管されている坂本直寛邸の解体材 ▶



坂本直寛邸の構造

※資料写真と解体材からの想定図

札幌市立大学で教員してます西川忠です。この活動を始める前は、浦臼に坂本龍馬の甥の住宅があったことは知りませんでした。明治期にこれだけの住宅を建てたことは驚きですし、解体材が残されていたのも驚きでした。町の財産として活かせると良いですね。

うらうす建物紹介 番外編

浦臼のハイカラ建築

ハイカラな街並みが浦臼にありました

浦臼町内には今も洋風の建物がいくつかありますが、実は以前の方がたくさん建っていました。いわゆる「ハイカラ建築」で、道内では函館や小樽などの港町で多く見られます。既に除却されてしまったものがほとんどですが、以下に紹介します。
※写真はすべて浦臼町郷土史料館所蔵

浦臼村の発展を支えた役場庁舎

現在の役場庁舎の1代前の庁舎で、写真①は昭和10年頃の浦臼村役場です。
平屋の木造で、本庁舎に渡り廊下を介して付属棟が繋がっています。洋風下見板張りに上げ下げ窓の外観や、三角屋根の頂部を斜めにした「ドイツ破風」が印象的です。写真では外壁の色が分かりませんが、筆者の記憶では白色だったように思います。北海道大学旧農学部の歴史的建築物と似た様式といえるでしょう。

写真①　昭和10年頃の浦臼村役場

役場とお揃いのデザインの消防署庁舎

写真②は大正15年に建てられた木造2階建ての消防署庁舎です。洋風下見板張りやドイツ破風が役場庁舎と共通なのは、近接して建っていたのでデザインを揃えたのかもしれません。
正面頂部の台形形の白い塗壁は漆喰塗りと思われますが、これは並びに建つ旧宮本新聞店と同じ様式です。2階の窓は引き違いです。

写真②　消防署庁舎（大正15年建築）

札幌市立大学の西川忠です。ここで紹介した役場、消防署、郵便局は私もおぼろげに記憶にあります。当時はまったく意識しませんでしたが、こうやって過去の資料写真を見ると、浦臼にもカッコいい建物があったんだなぁと思う次第です。

「館」として愛されている郵便局

館のページでも紹介しましたが、昭和10年頃に建てられた木造2階建てです。当時は郵便と電話交換の業務が行われていました。
写真③のように、外壁は幅広の素地の和風の下見板張りです。一方、大きな2連の上げ下げ窓と腰折れの寄棟屋根は洋風のデザインです。
増毛街道（現国道275号線）の西側に、札幌側から郵便局→消防署→役場庁舎→旧宮本新聞店が近い距離で並んだ木造洋風のハイカラ建築通りが想像できます。

写真③　郵便局（昭和10年頃建築）

瀟洒（しょうしゃ）な岩村農場の邸宅

岩村農場は浦臼に入植・開墾した農場の中で最も大きな農場でした。岩村八作が明治26年に入植した後、明治30年代に写真④の邸宅を建てています。1階は和風の下見板張り、2階は漆喰塗壁に上げ下げ窓が並んだ洋風のデザインです。寄棟屋根の頂部には立派な「立物」が付いています。
浦臼で友成邸が和風住宅のお屋敷の代表格とするならば、岩村邸は洋風邸宅の代表格と言えるでしょう

写真④　岩村邸（明治30年代建築）

うらうす建物紹介 番外編

ちょっと前の街並み

浦臼市街の歴史的建築物の街並み

ちょっと年配の方なら、浦臼の市街に古い建物が並んでいた記憶があると思います。ここでは、その歴史を資料写真で辿ってみました。

70年間変わらなかった街並み

役場周辺の浦臼市街中心部には歴史のある建物が多く建っていたことが、過去の写真を見ると良く分かります。写真①～③は国道275号線沿いの尾花商店の並びの風景です。戦前から平成20年頃まで、ほぼ変わらない街並みであったことが分かります。限られた範囲とはいえ、およそ70年もの間、街並みが変わらずに残されている例は、北海道では数少ないと思われます。

写真③で見ると、札幌側（写真の右側）から順に、いとうさんちの焼肉苑（木造2階建て）→尾花商店母屋（木骨石造2階建て）→尾花商店蔵（木骨石造2階建て）→ゴトー薬粧（煉瓦造2階建て）→横田商店→マルサン高橋（木骨石造2階建て）の6棟が並んでいます。

写真には写っていませんが、国道を挟んで向かい側には後藤商店（石造2階建て）→聖園教会（木造一部2階建て）→館（木造2階建て）の3棟が並んでおり、浦臼村の発展を支えてきた歴史的建物が約300mの狭い範囲にまとまっています。

写真①　戦前と思われる

写真②　昭和40年代か

※写真はいずれも浦臼町郷土史料館所蔵

15年ほど前の街並み

図①は平成20年頃の街並みをイラストにしたものです。現在は国道の東側（図①の上側）は、尾花商店を除いて残っていませんが、このイラスト通りに存続していれば、昭和初期にタイムスリップしたような、北海道の農村開拓の歴史を代表する道内有数の歴史的建築のエリアとして評価されたでしょうから、少々残念に思う次第です。

写真③　平成20年頃

札幌市立大学の西川忠です。ここは私が子供の頃、毎日小学校まで通っていた通りでした。今、仕事で歴史的な建物に関わるようになって、この街並みの貴重さを改めて認識しているところです。身近にあると、案外気づきにくいものですね。

図①　平成20年頃の街並み

うらうす建物紹介 番外編

自然豊かな三日月湖

暴れ川の置き土産

今回は建物を離れて、かねてより私がぜひ書きたいと思っていた三日月湖の話をします。
空知平野をつくった石狩川は、かつては激しく蛇行していたため、氾濫を繰り返すとんでもない暴れ川でした。三日月湖はその暴れ川の置き土産です。

浦臼は全国でもっとも三日月湖が密集している地域

三日月湖は蛇行した河川が氾濫した際に短絡することで取り残されて自然にできるものと、河川改修によるものがありますが、浦臼の三日月湖は自然に形成されたものです。町内には図①に示すように大小８つの三日月湖があります。石狩川の上流側から、ピラ沼→トイ沼→浦臼沼→新沼→ウツギ沼→月沼→三軒屋沼（東沼・西沼）と約10kmの間に並んでいます。これは全国的に見ても三日月湖がたいへん密集している数少ない地域といえます。
また、周囲を水田に囲まれて市街化されていないため、水鳥が生息しているなど、豊かな自然を見ることができます。平坦で交通量の少ない道路で結ばれているので、サイクリングで沼めぐりを楽しむのがお勧めです。以下、主な三日月湖について上流側から順に紹介します。

図①　浦臼の三日月湖の位置

国土地理院Web提供地図に書き込み
https://maps.gsi.go.jp/#12/43.418765/141.780624/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c0g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0

写真①　ピラ沼

ピラ沼：舗装された道から少々歩きますが、沼畔からは水鳥を見ることがでまきます。

トイ沼：浦臼の三日月湖のうち、唯一車で沼畔まで車でもアクセスできます。

写真②　トイ沼

浦臼沼：石狩川の堤防に上がると沼全体の形が見え、浦臼市街や樺戸山を一望できます。近くに坂本直寛の住宅がありました。

写真③　浦臼沼

新沼：浦臼の中では最も大きな三日月湖で、水鳥を見ることができます。樺戸山をバックにした水田の広がりが絶景です。

写真④　新沼

三軒屋沼：東沼と西沼が向い合せに位置していますが、かつては双方がつながってΩ形に大きく蛇行して流れていました。石狩川の氾濫によって取り残され、現在の状態に自然に生成されました。

写真⑥　三軒屋沼（東沼）

写真⑦　三軒屋沼（西沼）

写真⑤　新沼から望む水田と樺戸山

札幌市立大学の西川忠です。今回は建物ではなく三日月湖をとりあげました。存在自体は知っていても、全貌を見ることはないでしょうから、その価値に気づきにくいと思います。でも、浦臼の三日月湖は自然豊かで簡単に楽しむことができる浦臼の貴重な財産なので、多くの人に知ってもらえると良いと思います。

【お礼】
この冊子をまとめるにあたり、建物の調査に協力いただいた所有者・管理者の皆さまに、この場を借りて感謝申し上げます。

【執筆者】
三角颯音（みかど かざね）　札幌市立大学大学院デザイン研究科 博士前期課程１年
大寺梨香（おおてら りか）　札幌市立大学デザイン学部 ４年
西川　忠（にしかわ　ただし）札幌市立大学デザイン学部 教授

【調査協力者】
関信之介（せき　しんのすけ）札幌市立大学大学院デザイン研究科 博士前期課程１年
木下涼葉（きのした　すずは）札幌市立大学デザイン学部 2023 年３月卒業